七月の詩（俳句）

山口　誓子

匙なめて
童たのしも
夏氷

松尾　芭蕉

閑かさや
岩にしみ入る
蝉の声

加賀　千代女

朝顔に
釣瓶とられて
もらい水

暑い夏の日、子供たちが、かき氷を食べています。ていねいにスプーンをなめながら、冷たさと甘さを味わっているのです。

（季語　夏氷　夏）

なんてしずかなのでしょう。その中で、蝉の声だけが、まるで岩の中にしみていくように聞こえています。

（季語　蝉　夏）

朝起きて見ると、井戸のつるべに朝顔のつるが巻き付いて咲いてしまい、水をくむことができなくなりました。それをはずすのがかわいそうで、水をもらいにいきました。

（季語　朝顔　秋）